

これでバッチリ飼育委員会！

三本隆行

7月に行われた奈良市教育委員会が開催した教員研修において講師をつとめたが、そのおりに使用した資料を紹介したい。

@夏期教員研修資料

「A小学校飼育担当教師C先生からの手紙」

2005年3月、県内のA小学校のB校長から依頼があった。「学校で飼育している鶏を処分して欲しい。」「ただ凶暴なだけの雄鶏を児童に世話させてもく動物は怖い」と言う感情しか芽生えない。また、飼育舎に入って怪我をした児童や教職員もいる。」

依頼を受けて、引き取ってもらえそうな施設を探す一方、最悪の場合安楽死も考慮したが、獣医師会内部から「たとえ凶暴な動物でも、飼った以上は終生飼育することも教育の一環ではないか。」といった意見が多数を占め、管理職を説得した。そして、7月、A小学校の飼育担当教師C先生から手紙が届いたので以下に掲載する。

「これでバッチリ飼育委員会」

1 飼育委員会の人気の個人差の大きさ

動物に対して、体質的に合わない人が存在するのは事実である。また、児童の中には、委員会決めのときにクラスにより、じゃんけんで負け仕方なく入る児童もいる。教師は、命を預かる委員会には敬遠しがちだ。

ここ数年前から、学校内に不法侵入し、校外では、児童の命に関わるような事件もあり、児童による飼育の仕事の制限がある。つまり、長期休業中の世話・放課後の活動ができない。限られた休み時間のみの活動になっている。

その上、「鳥インフルエンザ」などの飼育動物の病気感染の不安が大きいので、保護者からの要望も多様化している。また、活動中の衛生管理の困難さもマイナスの大きな原因であると思われる。しかし、反対に「動物が好き」という人も多く存在する。

2 動物から得られることの是非

「うさぎ」「アヒル」「金魚」「小鳥」「にわとり」などが多く飼われているが、小動物とふれあい、その命のぬくもりを肌で感じられることが一番大切である。しかし、本校の場合、「鶏」である。おとなしい「うこっけい」は、まだしも卵を産んでくれる。雛もかえるし、温かな卵を持ち帰る楽

しみもある。しかし、本校には鶏は鶏でも「凶暴なにわとり」と皆から、お墨付きをもらっている1羽の雄鶏がいる。私は、飼育活動を通し、「怖い」「嫌い」こんな感情を子どもたちに植え付けることは、本末転倒であると考えている。さらに「鳥インフルエンザ」の脅威と学校で飼うこと事態にさまざまな考えも出てくる。

3 世話をする喜びを感じさせるため

久しぶりに飼育委員会の担当になり、上記のような課題をいかに克服していくかを考えた。まず、仕事の内容を説明する前に、獣医さんに鶏を抱かせてもらい、その心音を聴診器で聞かせてもらうことにした。そして、具体的にどのような世話をしてあげたらよいか、また、そのときの衛生管理方法も教えてもらった後、委員会を発足させたのである。

また、初めての世話をするときに獣医さんが立ち会ってくれ、「うこっけい」の相関図を教えてください。くださったことで、にわたりの苦労も気持ちも行動も少しは理解できたようである。

4 当番活動の様子と効用

幸いにも、ほとんどの児童が積極的に当番をやりたがってくれた。保護者の同意書も多くの児童が進んで提出した。しばらくは、当番を決めずに世話をしたい児童を中休みに集め、みんなで仕事をさせ、その様子を観察した。今は、5人の当番と1人の鍵の開け閉め片付け当番の6人が協力してやっている。(当番外でも、4点セットを装着していれば手伝っていいことにしているのもっとたくさんの児童が活動している)

問題の「凶暴なにわとり」の世話をやりたいという児童が現われ、2人の児童が毎日世話をしてくれることになった。この児童は、少々トラブルメーカーの腕白くんであったが、彼らが近づくと「腕白なにわとり」が羽を上げ、小屋の片隅に行くのである。(普通は餌や水をやる時に飛び掛かってくる)そこで、得意になった彼らに分担させることにしたところ、毎朝、飼育小屋の観察から始まり、何か変わったことがあれば、職員室の前で私を待つのである。中休みになれば、鍵を取りに飛んでくる。昼休みも委員会の児童だけは小屋に入って鶏と遊んでいいことにした。もちろん彼らは、今のところ小屋の中で長い時間を過ごしている。1羽ずつに名前を付けようという意見も

出ている。

不登校気味の児童も2名いるが、そのうち1名は進んで副委員長に立候補し、生き生きと当番活動をしている。自分より弱い立場の動物の世話をする喜びが与えてくれる力の大きさは測り得ないとさえ感じさせられる。

5 衛生管理の簡素化と徹底

「鳥インフルエンザ」以来、本校では、レインコート、マスク、長靴、ゴム手袋の着用と消毒をしてきた。マスク以外は共有使用になり、反対に不衛生に感じられた。そこで、すべて個人持ちにし、長靴の代わりにビニル袋と輪ゴムで使い捨てのカバーを使うことにした。レインコートの代わりにゴミ袋で服を作らせ、ゴム手袋も薄手の使い捨てタイプを用意し、これらは1ヶ月に1回取り替えさせることにした。

一つ一つに名前を書かせ、手袋も洗って干す習慣をつけた。ゴミ袋とマスクは個人管理なので、それぞれが教室で保管し、マスクは家に持ち帰り洗ってくる。活動終了後には、アルコールスプレーで手の消毒をする。

この※4点を装着しないと鶏小屋には入れない約束をしている。

6 今後の課題と期待

このような積極的な当番活動が続くのもしばらくの間であると思われるので、様子を見ながら、当番の人数・仕事の分担などに工夫をして行く必要がある。(毎月1回の反省)

また、ここ数年教師だけで世話をしてきた長期休業の前に保護者に飼育協力をお願いし、児童にも飼育当番をさせようと考えている。(保護者からの要望もあり)動物を飼う楽しさと仕事を果たす責任感・成就感をしっかりと味あわせることを忘れ

ずに指導していきたい。きっと、学校生活で自分が活かされている時間を持たせることで、セルフエスティームを上げることができると思う。

4月28日に産まれた雛がはじめから元気がなく、獣医さんのご指導を受けてライトを当て、練り餌をあげて世話をしていたやさしい笑顔が学校生活のいろんな場面でも出させていきたい。

本校には、いつも子供達のことを考え、いろんな方面から関わってくれる保護者でもある獣医さんが存在することはどんなに心強いことか知れない。鳥が持つ病気に児童が感染しないように常に獣医さんとの連携をとり、ご指導をいただいきたい。

これで、バッチリ飼育委員会だ！！

A 小学校 飼育委員会担当 C 教諭

(事務局)三本先生方のグループは、年にのべ500回も学校に伺い相談に乗っています。

しかし実は、現時点で、奈良県も教育委員会が係わった「学校獣医師」という形は まだとれていません。学校への対応は、獣医師個人の情熱によります。つまり学校が獣医師の支援を受けられるかどうかにはばらつきがあるということです。

なお、ふれあい教室のときは手袋マスクを装着しなかったそうです。C教諭は、これら3点セット着用などの衛生上の注意は、鳥インフルエンザの鳥同志の感染を防ぐために、あるいは人から鳥に病気を移さないために行っていることで、特に人への心配でしていることではないと、理解なさった上で衛生観念のしつけとして行っておられるよう。

(社団法人奈良県獣医師会学校飼育動物委員会委員長)

